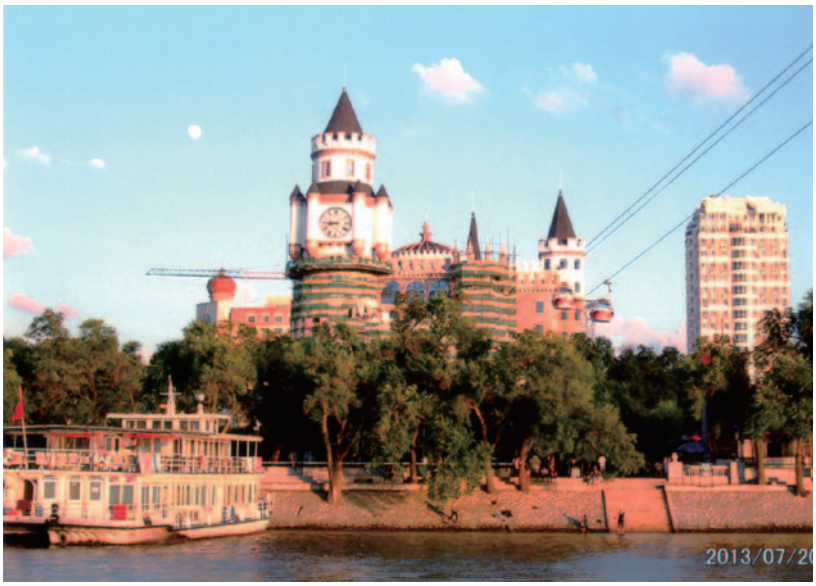
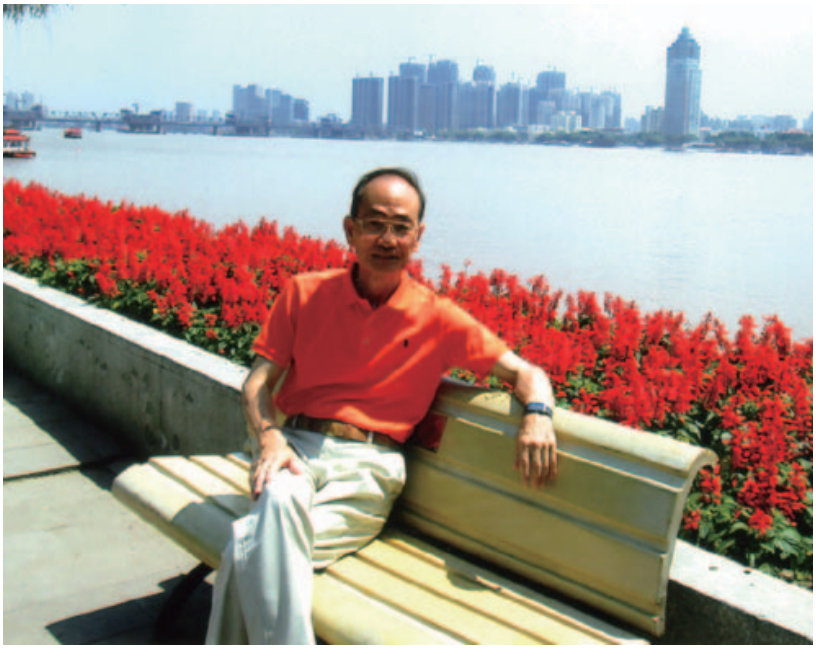
哈爾濱市（ハルピン） その3　ハルピン市内観光続き

寺西 俊英

2013年7月21日(日)の朝となった。昨夜は8時ころ夕陽が沈み、ようやく夜の帳が下りはじめたが中央大街は人々でごった返していた。各所でミニコンサートが開かれ、 モデルンホテルの二階のテラスではロシア人と思われる女性歌手が素晴らしい喉を披露していて、皆歩みを止めて上を見上げている。どのレストランも客でいっぱいであったが、何とか入り込むことができ夕食をとった。大連では繁華街でも白人を見ることが少ないが、さすがにハルピンは白人の観光客が目についた。結局夜10時半過ぎにホテルに戻った。



西洋の古城を思わせるロープウエイ乗り場


松花江を背に（太陽島にて）対岸はハルピン市内

という次第で朝はゆっくり起床し、迎えに来た友人とホテルの近くにあるKFC（ケンタッキー）に入った。私は、コーヒーとアップルパイとポテトを注文した。話が少しそれるが、帰国して数日経った7月29日の朝日新聞に「中国のKFCが三重苦」との記事が載った。成長促進剤で育てたニワトリが問題になっていたところに、氷から中国国内の基準の19倍の細菌が検出されたことが報道され大きな問題となり、業績不振に落ち込みつつある、というのである。私が注文したものには問題あるものはなかったが、チキンナゲットやオレンジジュ ースを注文した友人の腹具合も特に変化はなかった。けれども中国ではやはり食べ物には注意した方がいい。

さて、今日は太陽島観光が中心である。前号で紹介したように市内から見ると、松花江の対岸の緑に覆われた島が太陽島である。なぜ太陽島と名付けたのかは知らないが、中国人の多くは行ったことがない人も太陽島は知っていて、一度は行って見たいところらしい。ハルピンには既述のように1898年の中ソ間の条約後、一気にロシア人が増加したがこの島には彼らの別荘がたくさん建てられたことがよく知られている。

我々はホテル前からタクシーに乗り、ヨーロッパの古城に似せたロープウエー乗り場に向かった。歩いても行けない距離ではないが、何しろ今日も晴天

で午前中から暑くてたまらない。乗り場は、ゴミが散らばっていてお世辞にも綺麗とは言えない階段を３階まで歩いて登ったところにある。外国からの観光客も多いのにもうすこし小奇麗にできないものであろうか。

太陽島に行くのにはバスなどで松花江のやや上流に架かっている橋を通って行く方法と船で行く方法、そしてロープウエーの３通りがある。前回ハルピンに来たときは、船で対岸に渡ったので今回はロープウエーで行くことにした。さっそく往復80元の切符を買う。

４人～６人乗りの小さなゴンドラに乗り込むとすぐ発車して一気に大空に向かって昇って行く。景色もそれに連れて遥か遠くまで見渡せる。川の中央あたりが一番高くなっているが、川幅が広いためかなりの時間空中散歩の気分が味わえる。人気が高いのもうなずけた。まもなく太陽島に到着。階段を下りて１階の出口に向かうとアイスクリームを売っているお店があり早速求めた。前回来た時のことを思い出しながら足の向くまま散歩する。前方に別荘であろうか。いくつかのロシア風建築が残っている。大分傷んでいたが、壁面を見ると歴史的建造物であることの説明が書かれた銅板が貼ってある。当時の栄華の一端が窺えた。

また土手に上がると電気自動車が来たので乗り込む。暑い日にはありがたい。公園は広く、その中に人造湖の荷花湖や日本式庭園の「ハルピン新潟友誼園」や氷雪芸術館などがある。

ハルピンと言えば、氷雪祭りが有名で、極寒の時期にもかかわらず多くの観光客でにぎわうらしい。1985年に始まったというから、64回目を数える札幌雪祭りには及ばないが、今冬が29回目である。メイン会場はこの太陽島と前回紹介した兆麟公園だそうだ。大連勤務中に一度は見に行きたかったが、遠いうえに寒さに弱い私はついつい行きそびれてしまった。高速鉄道が開通した今、いずれ見に行きたいと思う。

ロープウエー乗り場の近くに「太陽島ロシア風情小鎮」があり20元払って入る。入場券の代わりにこの場所専用のパスポートをくれる。サイズは少し小さいがロシアのパスポートとそっくりだそうだ。小鎮内にはロシア風の建物がいくつも建っていて「カチュ ーシャ」の曲が流れている。奥の建物ではロシアの民族舞踊のショーをやっている。ロープウエーからの景色は素晴らしかったが、私には太陽島はさほどの観光地とは思えなかった。国家観光局でもトップクラスの5A級ではなく4A級の評価になっている。

このあと本当は太陽島の北方に隣接している中国版サファリパークである「東北虎林園」で虎を見に行きたかったが、歩いていける所ではないし暑いし時間もかかりそうなのでまた空中散歩して市内に戻った。まず手元の人民元が少なくなってきたので中国銀行に行って換金することにした。友人にレートを聞いてもらうと、１万円は手数料を引かれると600元にもいかない。昨年は800元くらいあったのにアベノミクスのおかげでかなりの損失である。とりあえず３万円だけ換金し様子を見ることにした。

その後タクシーに乗って市内見物に繰り出し、在来線のハルピン駅に向かった。ハルピン駅と言えば、伊藤博文が暗殺されたところで有名であるが、アールヌーボー様式の華麗な駅舎は取り壊され今は正面が野球のホームベースの形をした安っぽい建物となっている。事件当時の面影はどこにも残っていないという。長春駅もそうだが、各都市にあった城壁といい、もうすこし歴史的建造物を保存するという文化を持ってもらいたいものである。

ここで少し本事件を振り返ってみたい。1905年に日露戦争に勝利した日本は東北地方の経営に乗り出した。1909年10月26日に当時枢密院議長であった伊藤は、満州・朝鮮問題に関してロシアの蔵相と会談するためハルピン駅に赴いた。列車内で蔵相と会談後、駅のホームでロシア兵の閲兵を受けていた伊藤は群衆を装った安重根に銃弾３発を撃ち込まれ、30分後に絶命した。安はその場でロシア官憲に逮捕され２日後日本側に引き渡された。1910年２月14日、旅順の関東都督府地方法院で

龍塔（ドラゴンタワー）

死刑判決。3月26日死刑執行、31歳の生涯を閉じた。その5か月後の8月29日、日韓併合で大韓帝国は消滅した。伊藤は日韓併合には反対であったといくつかの資料には書かれているが、もし暗殺されなければ歴史は違っていたかもしれない。この事件の歴史的評価は日韓で大きく異なるのはご承知の通りである。韓国では彼は抗日闘争の英雄とされ、ソウル市には「安重根義士記念館」があるようだ。私は一昨年旅順監獄を見学したが、その時安重根の収監されていた赤レンガ造りの独房を見た。小さな窓の横に「囚禁朝鮮愛国志士安重根的牢房」とありその下に説明文が記載された銅板が貼り付けてあったが、それを思い出すたび心は重い。

この事件に関し、ネット上に記載されているエピソードを紹介したい。私も全く知らなかった――。

①旅順監獄の独房に収監された安の監視に当たった日本人看守であった“千葉十七”は、当初伊藤を暗殺した安を憎んでいた。しかし話を重ねる毎に安の人柄や思想に共感を覚えるようになった。そして処刑の直前に千葉に「東洋に平和が訪れ、韓日の友好がよみがえった時生まれ変わってお会いしたいものです」と語ったそうだ。処刑後、千葉は終生供養を欠かさなかった。彼のお墓のある宮城県栗原市にある大林寺には安の顕彰碑が建立され、1992年から日韓合同で毎年千葉夫妻と安重根の合同供養が営まれているという。

②安重根の息子・安俊生は親日家であった。ソウル市内に1932年建立の伊藤博文を祀った博文寺というお寺があったそうだが、俊生は1939年に博文寺を訪れ伊藤博文に対して焼香したという。韓国独立後博文寺は破却されている。――――

伊藤博文暗殺事件に対しては浅学の私は意見を控えたいが、この二つのエピソードは不幸な出来事を乗り越え、日韓の友好のために胸に刻んでおくべきことではなかろうか。

ハルピン駅に行ったのは、ハルピン西駅になかった高速鉄道の時刻表を求めるためでもあったがここにもなかった。皆不便ではないのであろうか。駅を後にして東北地方一の高さを誇るテレビ塔に行った。今回初めて見たがデザインはすっきりしていて、銀色に輝いている。高さは東京タワーより5メートル高い338メートルである。塔の名称は「龍塔」(英語ではドラゴンタワー) と呼び、2000年に完成した。確かに龍が天に昇るイメージが窺える。展望台で空中散歩をしたかったがここも時間が過ぎていて下から見上げるだけであった。

そのあとソフィア寺院と共に現存するもうひとつの「ウクライナ寺院」を見学した。この寺院は何様式の建物か知らないが、ソフィア寺院よりずっと小さく、外壁はシンプルで丸みを帯びている。色合いもすこし異なる。同じロシア正教の寺院とは思えないくらいだ。この寺院はいまだに信者の礼拝に使われているそうだ。

まだ見学したいところはあるが明朝は7時に起床して8時30分の高鉄に乗車するのでホテルに向かうことにした。途中にロシア風の堂々たる建物のそばを通ったが、聞くと「莫斯科（モスクワ）大劇院」だそうでロシア人のショーや中国民族楽器の演奏などがあるレストランシアターとのこと。これまで

ウクライナ寺院

述べてきたように街の各所にロシアの影響が見られた。

ハルピン市の稿の終わりに歴史に興味のある方に特におすすめの場所を紹介したい。と言っても私は行ったことがないのでガイドブックや歴史書の助けを借りながら書き進めてみたい。

それは、「金太祖陵」である。中国国内には、西安市の「秦始皇陵」をはじめ北京郊外にある「明の十三陵」や河北省にある「清の東陵、西陵」、瀋陽にある「清の昭陵、福陵」など広大な陵墓が数多く存在する。

この中で「秦始皇陵」と「明の十三陵」の他はすべて女真族の陵墓である。女真族は10世紀ころ東北地方に現れたツングース系の民族と言われ、そののち瀋陽を中心とした東北地方に定住した遊牧民である。「金太祖陵」は「金」を建国した完顔阿骨打（1068年～1123年）の陵墓である。

ハルピン市の東南約20㎞の阿城区にあり、車で1時間ほどで行けるそうだ。5万平方メートル（約1万5千坪）余りの敷地には、玉帯橋、門殿、宝頂、寧神殿、地下宮などの遺跡が残っている。完顔阿骨打（ワンヤンアクダと読む）はいくつかの部族に分かれている女真族の中で「完顔部」と呼ばれる部族の首長で、それらの部族を統一し1114年に建国した。「金」の初代皇帝である彼は、女真文字を制定し軍事制度を整えるなど金国発展の礎を築いた。そして契丹族の「遼」と覇を競い1125年に滅ぼした。

彼の死後も金は領土の拡張に邁進し、宋（960年～1126年・首都は開封）を南に追いやり（南宋＝1127年～1279年、首都は杭州）、北京を首都にして1234年モンゴル軍（後の元）に敗れるまで百年余り中国北部を統治した。ここで女真族は滅亡したかに見えたが、そうではなかった。時代は下がって約400年後の1616年女真族の愛新覚羅・ヌルハチは再度、女真部族を統一し「金」という国を建てた。前述の阿骨打の金と区別し、歴史上は「後金」と呼ばれている。この後金が1636年に「清国」となり、1644年明を滅亡させ北京に再度入城するという長い歴史がある。

私はこれまで東陵、昭陵、福陵を初め瀋陽にある故宮、さらには瀋陽の前の都であった遼陽にある東京城や東京陵などを見てきたが、これらを見たとき女真という民族のエネルギーのすさまじさを感じたものである。次回のハルピン旅行では、歴史に輝かしい足跡を残した女真族のルーツとも言える「金太祖陵」を必ず訪問してみたい。

ハルピン市の最後に、付記しておきたいことが出てきた。10月22日の朝日新聞に〈中国の大気汚染、今冬も深刻〉と見出しがあり、「東北地方の各都市で大気汚染の元になるPM2.5の数値が跳ね上がった」とある。中でもハルピン市は最もひどい場所でPM2.5が日本の環境基準値の約14倍となり、すべての小中学校が休校となった。20日には視界が5メートルしかないところもあった。原因は暖房のための石炭の燃焼量が一気に増加したことだそうだ。私が行った3か月前は汗が出るくらい暑く、空は青く澄み渡っていたのに、今は暖房がなければ生活できないのであろう。あまりの落差に驚くばかりであった。

（おわり）